

# Trends in the prevalence of airflow limitation in a general Japanese population: two serial cross-sectional surveys from the Hisayama Study

緒方, 大聡

<http://hdl.handle.net/2324/2236123>

---

出版情報 : 九州大学, 2018, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :



氏 名：緒方 大聡

論 文 名：Trends in the prevalence of airflow limitation in a general Japanese population:  
two serial cross-sectional surveys from the Hisayama Study

(わが国の地域一般住民における気流制限の有病率の時代的变化：久山町研究の 2 時期の横断研究)

区 分：甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

目的：慢性閉塞性肺疾患は気流制限を特徴とする疾患であり、公衆衛生上大きな負担である。わが国では、最近の数十年間の大気汚染や職業性粉塵曝露の低下と喫煙者の割合の減少により、気流制限の有病率が変化している可能性がある。本疫学研究は、わが国の地域一般住民において、気流制限の有病率および気流制限に対する危険因子の影響の時代的变化を検討した。

研究デザイン：2 時期の横断研究。

設定：1961 年以来継続中の前向き追跡研究である久山町研究のデータ。

対象者：1967 年と 2012 年に呼吸機能検査を受けた 40 歳以上の男女 1,842 人および 3,033 人。

方法：気流制限は呼吸機能検査において努力性肺活量に対する 1 秒量の割合（以後 1 秒率）70%未満と定義した。それぞれの調査年度において、年齢調整後の気流制限の有病率を男女別に検討した。気流制限に対する危険因子のオッズ比と人口寄与割合を調査年度間で比較した。

結果：年齢調整後の気流制限の有病率は、男女とも 1967 年から 2012 年にかけて減少した（男性では 26.3%から 16.1%、女性では 19.8%から 10.5%）。喫煙はいずれの調査年度においても気流制限に対する有意な危険因子であったが、その影響の大きさは 1967 年に比べ 2012 年で有意に高かった（1967 年：多変量調整後オッズ比 1.63 (95%信頼区間 1.19-2.24)、2012 年：2.26 (95%信頼区間 1.72-2.99)、異質性 P 値 0.007）。喫煙の気流制限に対する人口寄与割合は、2012 年の集団において 33.5%であり、1967 年の集団の 21.1%と比較して 1.5 倍に上昇した。

結論：わが国において、気流制限の有病率はこの 45 年間で有意に低下したが、喫煙の気流制限に対する影響は時代とともに強まった。